0007952310
X1340-299

博物館藏版

教草 第十三 藍一覧

凡そ日用に供する衣食の如き人皆之を衣し之を食し何ものたるを知らさるもこれを其物品を改正良善にするの術に暗く従て新規の発明なく國産を蕃殖せしめて各其業に就く事を知らず故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大畧を知らしむるときは他日脩産の基となるべし嚮に明治六年澳國博覧會出品の際に乗し各種職業の教草を編成せしめ画圖を加へ以て童蒙に便せり然に舊版第一より第廿四まで卯八年七月の火災に罹りしによりて今之を再刻し兼て従前の謬誤を正し遺漏を補ふ然と雖も其圖の舊版を再刻する者の如きは鮮明ならざるところあり看者之を恕せよ且我國産の多き此一部の盡す所に非ず此餘の如きは以て他日に譲る

明治九年二月

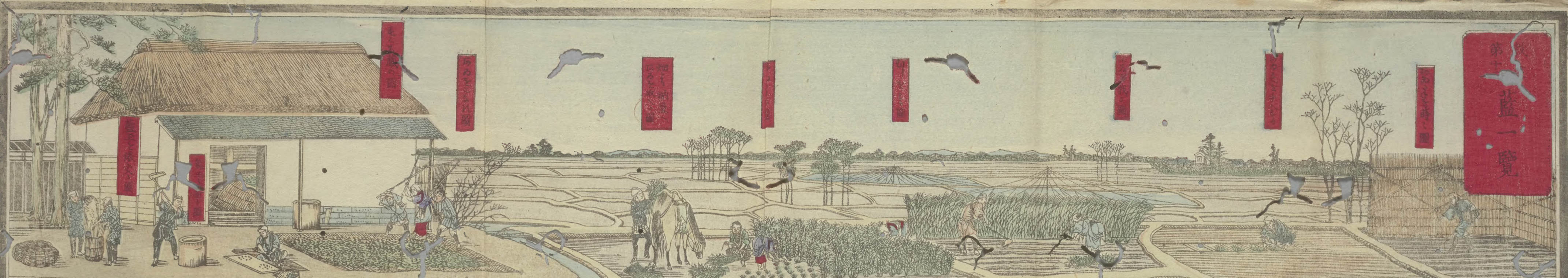
田中芳男記

第一 稲米 第二 糖製 第三 養蚕 第四 生糸 第五 樟虫
第六 野蚕 第七 葛布 第八 苧麻 第九 草綿 第十 織緯草木
第十一 索麪 第十二 葛粉 第十三 藍 第十四 青花紙 第十五 製茶
第十六 烟草 第十七 漆 第十八 蒔繪 第十九 蠟 第廿 白桕
第廿一 疊表 第廿二 香蕈 第廿三 製紙 第廿四 蜂蜜 第廿五 油
第廿六 臙脂 第廿七 澱粉上 第廿八 澱粉下 第廿九 褐腐 第卅 豆腐

定價金五錢

版權所有

第十□ 藍一覽



夫ま藍を培養するの地ハ山城、大和、河内、美濃、両野、三陸、播磨、四國、九州等の諸國より産出すと雖も就中阿波の中島なる二十二村を第一とす故[illegible]を主として其概畧を記載す其順序ハ先ヅ種子を下し苗を育て他の畑に轉栽し培養して之を收採し其葉を漆に製し終に藍[illegible]を造り之を染家の用に供し又画具に用ひ藥劑等に供するもの也

凡て藍ハ葉に數種ありと雖も五種を通常とす第一を青藍の小千本と云ひ第二を赤藍と云ひ第三を兩面藍と云ひ第四を百貫藍と云ひ第五を福葉と云ふ其葉形に各差異なりと雖も花實ハ異る事なし

種子を收るにハ二番藍を刈らずして實を結ばせ九月頃に收む又三番藍まても種子を收むるも可なれども山地の種子を佳とす此一斛の價ハ阿波の時價にて金二十五圓より三十圓位とす

藍ハ先づ節分に種子を下すを法とす其六七日前に水又茶の煎汁に浸し置節分の前日に揚げ之を攤げ莚の類を被覆し少し陰乾して翌日即ち節分に蒔付るなり又浸さ事なく其儘蒔事有り苗床の廣狹ハ十歩より十二歩を以て苗圃一段歩の料とす○苗床を拵るにハ數田土を能く耕し平坦にして堅に數條を設け其各條を一間毎に一間程として其條間なる平坦に種子を蒔くべし但し一歩に凡五六勺を充つ如此蒔撒したる後熊手にて十字に掻き種子を土に混交し土肥或ハ泥礫を被覆し足にて踏置く時ハ即ち日數二十日より廿四五日にハ必ず萠芽を生ず第一番手入にハ肥料を量三合より四合までを掛け夫より十日或ハ十二日を經て第二度目手入にハ肥料五合より六合までを用ゐ又同數を經て第三度目の止肥料にハ七合より[illegible]合までを用ゆ但肥料を用る毎に苗床の各條に枕木を置き之に梯子の類を掛渡し自在を設け苗の蔟立するを間抽き不生の處へ轉栽し其三度目にハ如此平均して栽るに注意し培養する事丁寧を盡すべし扱時ハ日より日數七十五日程を經て苗の長六寸より八寸までに至るを度とし他の藍園に移し栽るなり

藍園にハ麥又豆等の生立し畦の中へ一通り栽るを通常とす故に甲の栽坪より乙の處まで距離を一尺より一尺五寸までとし栽坪に苗七本より十本までを攫て栽ゑ大概一段歩に三千三百本位の栽坪とす

培養の最初ハ一段歩に肥料量二斗より三斗までを用ゆ此方法ハ雜草を耘り各栽坪へ肥料を一撮づゝ撒して土を蓋ふ○二度目ハ肥料二斗程○三度目ハ四斗より六斗までを用ゆ此時も耘りて根本へ土を培ふなり麥もさ豆も登る頃なれバ夫を收採するに在り○四度目ハ肥料を七斗より一斛三斗までを用ゆ此肥ハ粗[illegible]を佳とす如此大量を用る所以ハ入梅の前なるが故に霖雨あるを臆算し用ゆと云ふ土入ハ馬鍬の如き「アイカキ」と云を牛或ハ馬に繋着け畦土を二三回攪動し鍬にて畦裡へ土を掛く○五度目ハ七斗より一石までを止肥とす此時も畦の表裏へ土を揚るを要す東南を表西北を裏とす扱此止肥迄の毎間を日數八九日を置を通常とす

○肥料とハ干鰯其他木綿實の油滓油菜滓鮪滓「コマ井」鯡等を細碎し土肥を適量に調和したるを云ふ凡一段の肥ハ[illegible]にて價金十五圓程とす

藍に災害を為す蟲ハ十五六種あり其最なる物を圖す

收採ハ二方なり一番藍二番藍と云ふ一番ハ苗を栽し日より凡七十五日を經て夏の土用入より三日前に刈始む二番ハ一番の刈株より再生する者にして凡三十日を經て刈り採るなり

葉製ハ切粉打粉の別ち有り切粉ハ精粗を區別すと雖も乾して午後第二時より刈り馬等にて納屋に取入れ全草を三部に分け末の方十分の三を「上リン」中の方十分の三を「中リン」本の方十分の四を本葉と區別し鉈にて細刺し翌朝庭面に攤げ正午零時迄に數回叉等を以て交ぜ乾せバ黒色に化するを度とし簸分莖を去て正葉に俵に納む素より上中下を分つ○打粉ハ朝より刈倒し園にて日光に曝し午後第四時頃より納屋へ送り四分六に押切小草ハ其儘混ぜ翌日午後第二時迄に柄竿を以て打こなし葉と莖を簸分るなり又本の方四分通ハ別に製す其得る葉藍ハ大槩一段にて一番ハ重量四十貫目程より二十貫目程二番ハ十六貫目程より八貫目程と云ふ

漆製ハ乾涸の葉を納屋蔵の内にて凡八十日間に製す暖冷乾濕及び藍性の強弱に關するが故に一定ならずと雖も大抵上品ハ水を注ぐ事二十五六回中品ハ十五六回下品ハ八九回を定則とす扱水量ハ干葉重量百貫目に最初ハ水一石五斗より一石七斗迄上中下を斟酌し注ぎ莚等を覆ひ上品ハ四日中品ハ六日下品ハ九日程の間を隔て床返しをするが故に漸々水量を減少するを緊要とす此製ハ老練と雖も曽て確定せる水量適度も適きバ「サメル」といひ不及者ハ「ヤケル」と云ふ皆染家の用に適し難き故廉價なりと云ふ

玉藍製ハ漆重量三貫五百目程より四貫三百目程を一臼とし極品ハ二日上品ハ一日半中品ハ半日下品ハ三日分の一を以て水を少しづ和して搗るり適度に至バ板上に取出し二寸より二十五塊程に丸め堅まりて俵に納む其一俵の正味を十貫以百目程と定め賣買に供を扱出來高及び價金共各年差異あれと雖も昨辛未年ふハ出來高十九万七千八百二十八俵餘其上品一俵の價金六十七圓五十錢下品ハ僅五圓四十錢程にして頗る高下有る也

明治五年夏六月　安岡百樹 録

狩野良信 圖

明治八年十一月　高鋭一 閲

昭和七年
65992
東京大学総合図書館